

ヨーロッパとアジアの狭間にて

テオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノーブル』（1853）

畑 浩一郎

はじめに

1852年夏、オスマン帝国の首都コンスタンチノーブルを訪れたテオフィル・ゴーチエは、友人のルイ・ド・コルムナンにこう書き送る。「真実を告げる君の友人を信じたまえ。コンスタンチノーブルは大層ロンドンに似ており、東洋的なところは全くない¹。」人を驚かせることを好むいかにもゴーチエらしい言葉である。征服者メフメト二世が陥落させた古のビザンティウム。イスラムの最高君主スルタンのお膝元。そこにはしかし伝説の近東の都市の面影はまるでない。まるでイングランドの首都にいるかのようだ。ゴーチエがコルムナンに宛ててつづるこのようなアイロニカルな言辞は、後に彼が執筆する旅行記『コンスタンチノーブル』の特徴のひとつとなる。

トルコには確かに当時、西洋化の波が押し寄せていた。前世紀の後半以降明らかとなる帝国の弱体は日に日に深刻さを増し、スルタンとその政府は早急に対策を講じる必要に迫られる。この危機に際して採択されたのが西洋に範を取った近代化改革、いわゆる「タンジマート（恩恵改革）」である。1839年の秋にトプカプ宮殿の中庭で読み上げられたギュルハネ勅令に始まるこの改革は、国家の様々な分野に西洋の制度を導入し、それによって旧態依然とした体制を刷新するというを目的にしていた。こうした気運の中で、人々の生活の中からも伝統的なトルコの風物は急速に姿を消していく。代わってもてはやされるようになるのが西洋の文物であり、町にはヨーロッパ風の建築物が立ち並び、フロックコートに帽子とといった私たちのトルコ人が、オペラやコンサートへと身を運ぶ姿が次第に目立つようになる。

ゴーチエはこの「西洋化するトルコ」を彼の旅行記の中心テーマに据えている。そこには確かに斬新さがある。というのもそれによって彼は、従来の単純化された図式、すなわち「西洋」対「オリエント」という対立の図式を

¹ Lettre à Louis de Cormenin, 5 juillet 1852, Théophile Gautier, *Correspondance générale*, éd. Claudine Lacoste-Veysseyre, Droz, 12 vol., t. V, 1991, p. 71.

無効にすることになるからである。オリエントは次第に西洋に似通っていく。十字軍の時代にまでさかのぼる二つの文明の対立はもはや見られず、今後は次第に一方が他方を飲み込んでいく運命にあるだろう。ゴーチエが描き出すとするのは、こうした歴史の生々しいダイナミズムである。

しかしゴーチエの試みは両刃の剣でもある。「西洋化するトルコ」を描き出す作家は確かにひとつの独自性を獲得することになるが、その代償として自らが手がける文学ジャンルの意義を否定することにもなりかねないのである。「オリエント旅行記」の魅力の多くは、そこに描かれる異文化の紹介がもたらす新鮮な驚きにある。「近東の社会には、驚くことにこのような習慣があるのだ！」こうした「オリエント旅行記」ならではの言い回しはしかし、西洋と東洋の相似を強調していくゴーチエのテキストでは原則として禁じ手となるはずである。それでは彼の旅行記は一体どのような方向に向かっていくのか。作家の試みの到達点を探ることが本稿の目的である。

皮肉と諧謔

ゴーチエがこうしたテーマで旅行記を執筆した理由のひとつとして、彼がオリエント旅行に関して遅れを取ったという事実は指摘しておいてよい。ロマン主義時代を代表する大旅行家として知られるゴーチエだが、こと近東に限ってはその訪問を友人たちに先じられることになる。ジョゼフ・メリー、ネルヴァル、カミーユ・ロジエ、デュ・カン、フロベールなど、友人たちは次々に近東へと旅立ち、その成果を創作活動に生かしていく。同世代の芸術家たちの中でほとんど最後まで残ったゴーチエは、ようやくオリエントへ赴く機会に恵まれると、これまで手のつけられていないテーマ——「西洋化するオリエント」——で旅行記を書こうとするのである。

だが断っておかねばならないのは、当時この問題について言及した旅行者は決してゴーチエひとりではなかったという点である。急速に変貌するトルコの姿を前にし、歴史あるオスマン民族の栄光を惜しむ西洋人旅行者の数は実は少なくない。「イスラム教徒が自らの起源から離れ、戦と勝利の伝統を捨ててにつれ、これら古きオスマンの荘重さは地に落ち失われる。初期のカリフたちのあの華麗さは今日どこに見いだせよう²。」これは1833年にコンスタンチノーブルを訪れたアンリ・コルニーユの言葉である。

² Henri Cornille, *Souvenirs d'Orient*, Abel Ledoux, 1833, p. 51.

しかしゴーチエの旅行記において注目すべきなのは、彼の言辭はこうした単純な哀惜の念の吐露にとどまらず、むしろこの問題を正面から見据えた上で、それに徹底した批判を加えていくという点にある。変わりゆくトルコの姿を前に彼が用いる修辭は、辛辣な「皮肉」である。実際、冒頭に引いたコルムナン宛の手紙に見られるような諧謔は、彼の旅行記に一貫して現れている。例えばボスフォラスの岸边に新たに建てられた西洋風の瀟洒な家屋は、旅行者ゴーチエにこうつぶやかせる。「兵舎と製糸工場の気持ちのよい混合物だ³。」皮肉の利き具合は上々である。トルコ人自慢の建造物はこうして、西洋人の作家の目にはむさくるしくも無粋な建物として片付けられてしまう。しかしここは「ペラ」と呼ばれる繁華街に隣接する一等地で、この都市で最も洗練されていると評判の土地なのである。旅行者の評価は、それでも、いやむしろそれだからこそ容赦ない。

確かにこれらの家々はコンスタンチノーブルでも最も美しいものとして通っており、ペラはそれを大いに自慢している。たとえマルセイユやバルセロナ、パリに出してすら立派に通用する、と正当にも見なしているのだ。実際それらは最も文明化された、最も現代的な醜悪さを示している。(Ibid)

毒を含んだ言辭の背後に見て取れるのは、当時一部の芸術家たちに共有されていたひとつの価値観、すなわち「現代的なもの」への嫌悪である。トルコ人たちは何も分かっていない、と作家はため息まじりに考える。彼らが模範としている西洋の都市、「文明化」されていると言われる西洋の都市が、まさにこうした建築物——その建築様式をゴーチエは別の場所で「ブルジョア様式」と呼んでいる——のせいでいかに醜い容貌を呈しているかを彼らは知らないのだ。あまつさえ彼らは、こうしたおぞましい西洋の都市の模造品を作るため、自らの美しいアジアの都市の景観を壊すことに何の躊躇も覚えていない。このような試みがゴーチエの辛辣なあてこすりの対象となるのは当然のことである。

西洋化が進むトルコ社会においてまず何よりも目を引くのは、住人たちの服装の変化であろう。実際それこそが改革のもっとも顕著な成果の一つであり、人々は父祖伝来のゆったりとした上衣やターバンを捨て、今やヨーロッパ人と変わらぬ格好をしているのである。きらびやかな伝統衣装の喪失を惜

³ Constantinople (1853), dans *Constantinople et autres textes sur la Turquie*, éd. Sarga Moussa, La Boîte à Documents, 1990, p. 99. 以下『コンスタンチノーブル』の引用は本書により、引用末にページ数を記す。

しむ旅行者は少なくない。例えばマクシム・デュ・カンは次のような嘆きを発している。

ああ、一体なぜ彼らは、その美しい太陽にあれほどよく似合っていた壮麗な古の衣装を捨て去ってしまったのだろうか。モスリンのターバン、絹の外套、刺繍つきの上着、カシミアの肩章を捨ててしまったのは何ゆえか。腰に輝くまばゆい武器は今いずこ。〔中略〕彼らはこれら全ての古の壮麗を忘れ、今や我々の醜悪な上着と窮屈なズボンに身を包んで、よろよろと悲しげにまるで辱められたかのように歩いている⁴。

おそらくデュ・カンにとってみれば、この服装の変化は二重の意味で惜しむべきものとなる。まずトルコ人は伝統的な衣装を脱ぎ捨てることによって、オリエントの異国趣味の源泉であったあの『千一夜物語』の世界と訣別してしまった。代わりに今彼らが身に着けているのは、西洋のブルジョア階級の着る衣服、同時代の芸術家たちには「凡俗」の象徴としか見えないあの醜悪な衣装なのである。美学的な観点から見れば、トルコの改革は嘆かわしいものでしかない。

こうした服装の変化は当然ゴーチエにとっても愚かしいものとして映る。しかしだからと言って彼は、デュ・カンをはじめとした多くの旅行者がするように、それをあからさまに嘆くということは差し控える。代わりに彼が行なうのは、事実を極端なまでに誇張することでその滑稽さを強調することである。町を闊歩するトルコ人の若者たちに関する次の一文は、皮肉王ゴーチエの面目躍如たるものである。

エレガントなパリジャンから彼らを区別するのは、新作のやや生々し過ぎる新しさによってだけだろう。彼らは流行を追っているのではない。流行に先んじているのだ。彼らの身なりのそれぞれの服飾品には、リシュリュー通りカラ・ペ通りの高名な商店の商標が入っている。シャツはラミ・ウセ、ステッキはヴェルディエ、帽子はバンドーニ、手袋はジュヴァンといった具合である。(p. 100)

ゴーチエにしてみれば、パリジャン以上にパリジャンらしく見せようと努力するこれらのトルコ人の若者は、あるひとつの事実を見逃しているということになる。それは、コピーはどこまでいってもコピーであり、決してオリジナルを凌駕することはできないということである。

⁴ Maxime Du Camp, *Souvenirs et paysages d'Orient*, Arthur Bertrand, 1848, p. 109-110.

西洋の風習を熱心に取り入れようとするトルコ人たちの姿は、時として彼らの存在証明に関する不安を掻き立てることがある。この点で、トルコ人はしばしば作家によって一種異様な「混血児」として描かれるという事実は指摘しておいてよい。例えば旅行者をある時食事に招いてくれるトルコ人のパシャ（執政官）は、彼に次のような印象を与える。「もし英語の言い回しがトルコ人に当てはまるのならば、このパシャは完璧なジェントルマンの様子をしていたと言うところだ。」（p. 179）冒頭に引いたコルムナン宛の手紙に見られた英国との対比はここに再び現れる。トルコの首都が英国の首都を彷彿させるとすれば、このトルコ人は英国人と見まがうばかりだと言うのである。彼がまとっている西洋の服装はただ外見を一変させるだけではない。それはまるでそれを身につけている人の内実にまで影響を及ぼし、その出自をも変えてしまうかのようである。それほどこのパシャの変身は完成の域に達している。

また旅行者はコンスタンチノーブルに向かう蒸気船の中で、ほとんど怪物的とも言ってしまうトルコ人を目撃している。作家はその時の情景を次のように描き出す。

この一団の中にはかなり奇妙な男たちがいた。中でもひとりの肥満した少年は、髪の毛は完全に金色で、頬っぺたは丸々としており、顔色もすっかりピンク色で、まるでトルコ人に扮した、並外れて大きな英国人の赤ん坊のような様子だった。（p. 84）

同じく英国人との類似が指摘されるとはいえ、ここで喚起されるイメージは先ほどのパシャの場合よりはるかにグロテスクである。なぜなら「トルコ人に扮した英国人」のようだと称されるこの少年は、そもそも現実にトルコ人なのである。あたかも模倣を極めようとするあまり実際とモデルが入れ替わってしまったかのようである。また少年の奇妙にぶよぶよとした見かけは、異質なものの交配によって人為的に作り出された新たな生命体のような不気味な印象を与える。

ゴーチエのテキストはこのように、時としてトルコ人のオリジナリティの危機を示唆することがある。トルコ人たちは西洋人の模倣をするあまり、いずれはトルコ人であることを止めてしまうのではないだろうか。それほど彼らの西洋崇拜は作家には行き過ぎのように思えるのである。しかしこうしたトルコ人のアイデンティティに関する問題は結局のところ、ゴーチエにとっては二義的なものにとどまる。彼にとって真に重要なのは「美」に関する問

題である。トルコ人の風潮が彼に好ましく思えないのは、まず何よりそれが「美」を生み出さないからなのである。

芸術家の傲慢

ジャン＝クロード・ベルシェが指摘するように、ゴーチエは「芸術家」として近東を訪れた旅行者である⁵。旅行記の末尾で彼は自分の旅の唯一の目的は「都市のピトレスクな様相を捕えること」(p. 313)であったと述べている。実際「美」は彼にとって唯一重要な価値基準となり、それ以外の事柄はそれほど彼の関心を引くことはない。それゆえ旅行者がある晩、コンスタンチノーブルの夜空を焦がす大火事を目にして次のようにつぶやくにしても驚くには当たらない。「その不幸は悼むが、芸術家として僕たちはそれを楽しむことができた⁶。」(p. 236)たとえその火事で何十軒もの家が焼け落ちようが、炎が夜空に作り出すピトレスクな情景は芸術家ゴーチエを喜ばせるのである。

こうしたゴーチエの立場は確かにそれ以前の旅行者のものとは区別される。例えば彼は、西洋文明の起源に関する歴史的関心に絶えず捕われるシャトブリアンのような旅行者とは明確に異なる。『パリからエルサレムへの旅程』の作者が旅行中「何か古代の遺跡が見つかりそうな場所はどこでも、あちらこちらに走り回る⁷」のに対し、『コンスタンチノーブル』の作者は遺跡には興味はないと断言する。

もし僕が芸術家の周遊旅行の代わりに考古学者の旅をするのであれば、書籍を大量に引用して、ビザンティン帝国の昔の建物があつたかもしれない場所について長々と論じることもできただろう。[中略]しかし僕はありのままに描かれたクロッキーや、心を込めて表現された真実の印象の方を好む。(p. 208-209)

またゴーチエは、政治や外交に関する関心を持って近東を旅したラマルチーヌやサン＝シモン主義者たちとも異なる。スルタンによるイエニチェリ虐殺の意義という政治的な問題に触れそうになると、彼はそれゆえ直ちに話題を

⁵ Voir Jean-Claude Berchet, « Théophile Gautier, ou la saveur du monde : la modernité de Constantinople », *Bulletin de la Société Théophile Gautier*, 1990, n° 12, 2 vol., t. I, p. 161.

⁶ 傍点は論者による。以下同様。

⁷ François René de Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, dans *Œuvres romanesques et voyages*, éd. Maurice Regard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1969, p. 795.

転じる。「文学的銀板写真家という僕たちのしがいない仕事から離れてしまった。そこに戻るとしよう。」(p. 270)

ここで用いられる「文学的銀板写真家」«*daguerréotypeur littéraire*»という言葉以上に、コンスタンチノーブル滞在中の旅行者の立場をうまく表現するものはない⁸。彼はまるで写真に撮るかのように、言葉でもって見るものを永久に文章に定着しようと試みるのである。作家の言葉はただありのままの風景を切り取るだけではない。彼は描写する前にまずその素材を選び取る。その被写体の選択に彼の視点のオリジナリティがあるのである。旅行者の選択の基準は当然「美」にある。しかし彼が求めるのは単なる古典的な「美」だけではない。それはしばしばロマン主義的な「美」にもなりうる。散歩中の墓地で見かけた墓穴から覗く腐りかかった死体が旅行者の綿密な描写の対象となるのはそのためである。

黄色がかり鉛色になった顔をしかめた頭蓋骨、下あごの関節は外れ、眼窩は空洞となり、砂か、黒い腐食物の詰まった痩せた胸郭の上には、なげやりな感じで腕の骨が落ちかかっているのが見えていた。(p. 158)

また一見逆説的ではあるが、旅行者は時に、一般的な「美」とは正反対に位置するものに魅了されることもある。トルコ人の老女の見かけはそれゆえ、彼に嫌悪感を与えるどころか逆に大いに喜ばせる。「オリエントで老女がどんなに素晴らしい醜悪さに達しえるか知ることはできない。」(p. 95)

そしてゴーチエの独自の「美」の基準からすれば、トルコ人が身につけている西洋の服装はやはり嘆かわしいものでしかない。コンスタンチノーブルのバザールにあふれかえるヨーロッパ産の衣服を痛烈に批判した後、彼は次のように自分の考えを表明している。

僕がこれほどの辛辣さで語るのは、ある三人のトルコ人の少女たち、年齢は八歳から十歳ぐらいで、天女のように、いや天女は存在しないのだから天女以上に美しい少女たちの姿を見て深い悲しみを感じたからだ。それについて慰められることは決してないだろう。彼女たちはルーアン織りの上着の上に英国の毛織物の外套を羽織っていたのだ。太陽の光は彼女たちの魅惑的な面立ちには引き寄せられるものの、この現代の醜怪さをあえて照らそうとせず、おぞましさに後ずさりをしていた。(p. 130)

⁸ ゴーチエがこの言葉を使うのはこれが初めてではない。七年前のスペイン旅行の際にすでに彼はこの言葉を用いて自分の立場を説明している。Voir Théophile Gautier, *Voyage en Espagne* (1845), éd. Jean-Claude Berchet, GF-Flammarion, 1981, p. 197.

西洋の上着や外套が旅行者の怒りをかき立てるのは、ただそれ自体に優美さが欠けているからだけではない。彼が憤るのはむしろ、こうした衣服のせいでトルコ人の少女特有の美しさが台無しになってしまうからなのである。

ある時、礼拝に赴くスルタンを見物しようとする旅行者は、そこで護衛の兵士たちを目にする。彼らは皆「改革式」の制服、すなわちズボンにぴっちりとした上着、それに赤い「フェズ」と呼ばれる帽子を着用している。その姿を見て旅行者は言う。「ほとんど新^{ジャン}兵^{ジャン}のものと言ってよいこの制服は、これらの兵隊の風変わりな日焼けした頭と奇妙な対照を成している。この頭にはイエニチェリのターバンの方がはるかによく似合うだろう。」(p. 173)トルコ人の服装の変化についてのゴーチエの考えは、この一文に要約されている。すなわち彼によれば、これらの制服はトルコ人の容貌には「似合わない」のである。それぞれの民族にはその容貌に似合った服装がある。トルコ人の頭に最もふさわしいのは、西洋の帽子ではなく伝統的なターバンなのである。

『コンスタンチノーブル』を貫くひとつのキーワードに「不調和」*« dissonance »*がある。西洋化改革を押し進めるトルコについて作家の筆が辛辣さを見せるのは、そこに「不調和」が見られる時である。ハレムの豪華な東洋風の調度品の中に、まるでパリはマレ地区の年金生活者の家にあるような西洋の置き時計が紛れ込んでいるのを目にした時、作家は憤る。「芸術家を嘆かせるこれらの不調和は良趣味を謳う全てのトルコの家庭に見いだされる。」(p. 188) またフランス人の貴婦人がシャンゼリゼを逍遥するのに使うようなエレガントな馬車の窓に、思いがけずイスラム教徒の女性のヴェールを見出した時も同様である。「対比はあまりに唐突で、ひとつの不調和のように衝撃を与える。」(p. 291) さらに彼の怒りは、バザールで東洋の縁飾りを真似た英国製の布地を見つけた時、最高潮に達する。

白状するが、僕はこのような不調和には歯がみする思いだ。これほど敵意のある赤、これほど気難しい青、これほどぞんざいな黄色を生み出し、いかなる利益のためか知らないがオリエントの清澄な色の調和を乱す産業、貿易、文明などは喜んで悪魔にくれてやる。(p. 129)

ヨーロッパ製の高性能な機械は、東洋風の飾り模様のついた布地を生産することができる。しかしその偽善は、人工的であればけばしい色調によって一目で分かるのだと旅行者は言う。ゴーチエによれば、コンスタンチノーブルの

バザールに似合うのはブルサの絹である。それは安価ではあるが「色合いは魅惑的で、手触りも大変なめらか」(Ibid.)なのである。

トルコに氾濫する西洋の事物に対し、ゴーチエはしばしばこのように批判的な態度を見せる。コンスタンチノーブルに流れ込んできているのは明らかな異質物であり、それはトルコの大地に持ち込まれると否応なく「不調和」を生み出すと彼は言うのである。無論このような理屈はあくまで作家個人の美的感覚にのみ立脚したものである。それが「美」を生み出さないからといってトルコの改革を批判するのは、いかにも西洋の芸術家特有の傲慢な態度であると言える。しかしそのような事実を超えてここで真に興味深いのは、芸術家ゴーチエにとって、トルコの西洋化は全て忌避すべきものとは映らないという点である。『コンスタンチノーブル』はありきたりな二元論で読み解けるほど単純な書物ではない。

ゴーチエがトルコの西洋化、近代化を批判するのは、それが「不調和」をもたらす場合に限られる。言い換えれば、「西洋」と「東洋」の事物の出会いとは時として思いもかけない美的効果を生むこともあり、それは反対に彼を喜ばせるのである。例えばバザールのある商店の軒先は彼の注意を引く。「砂糖菓子屋の小さな店が僕の目に留まる。そのショーケースは、壮麗さではないにせよ少なくとも独創性を見せている。」(p. 120)そこに陳列されているのは、砂糖で精巧に再現されたミニチュア細工の蒸気船である。「東洋の伝統手法」で作られた「西洋の近代技術」の象徴。その奇妙な組み合わせは旅行者を楽しませる。さらに驚くべきことに、ゴーチエは、他の場所であれほど毒づいている西洋の服装をまとったオリエント人の姿を評価することもあるのである。コンスタンチノーブルのアジア側の村邑カディ・キョイに集まるギリシア人女性について、彼は次のように書いている。

古くからの衣装は消え去っていた。三人の若いギリシア人女性たちはそれゆえフランス風の装いをしていた。しかし彼女たちのかぶり物や、我が国の上品な女性たちの着るキャラコにかなり似た刺繍つきの絹の上着は、彼女たちに充分ビトレスクな外観を与えていた。(p. 283)

ゴーチエの主張に一貫性が欠けていると言って彼を批判するのはお門違いである。なぜなら彼がここで見せているのは、先ほどのものよりもさらに根の深い「傲慢さ」、芸術家の真の「傲慢さ」であるからである。ここでは彼は、読者に対し首尾一貫した論理を提示する義務など最初から自らに課していない。彼にとって重要となるのは彼独自の美的感覚のみであり、彼は自分が美

しいと思うものをただあるがままに「美しい」と評するのである。こうした作品を前に読者が取る態度としては、紡がれていく文章をただそのまま受け取る以外にない。

「不在」のオリエント

ゴーチエがいかに皮肉を言おうと、コンスタンチノーブルに流れ込む西洋文化の勢いは止まらない。カフェでは男たちがパリやロンドンの政治事情について熱心に議論している。驚くべきことに彼らは、大臣や外交官たちの複雑な立場を完璧に理解しているのである。旅行者は皮肉にあてこする。彼らは「まるで『コンスティチュショナル』紙や『デバ』紙の定期購読者のように話す。」(p. 181) また西洋化の波はオリエント社会で最も外界から隔てられているとされる場所、すなわち「ハレム」の中にまで入り込んでいる。今日では後宮の女性たちは、伝統的な水ギセルの代わりに西洋の紙巻たばこを吸うし、あるトルコ人女性を訪問した西洋人の女性は、お土産にパリ製の香水の壺を持たされる。(p. 190) さらにヨーロッパの風習の流行はこの世だけにとどまらない。それは何と死の世界にまで及んでいるのである。ある日墓場を散策していた旅行者は、そこに石づくりのターバンで飾られた伝統的な墓石の代わりに、まるでパール・ラシェーズ墓地にあるかのような西洋風の墓を目にする。作家はため息まじりにつぶやく。「死にもまた流行があり、立派な人々だけがそこに最新の趣味で埋葬されていた。僕としては、ターバンが彫込まれコーランの文句が金字で書かれたマルマラ海の大理石でできた墓柱の方が好ましい。」(p. 159)

このように各地で尊ばれる西洋文化は、実際トルコ人の生活に根付いているのだろうか。ゴーチエはこの点に懐疑的である。実際旅行者はいたる所で、西洋人の見かけの下に不格好に隠されたイスラム教徒の三日月剣を目にする。例えば食事の際にフォークとナイフを使うのはフランスや英国を訪れたことのあるごく一部のトルコ人だけであるし、しかもそれは「外国人の目の前で、文明人であることを示すため」(p. 121)に行われるに過ぎない。スルタンに付き従う政府高官は確かに西洋風の服装をしているが、旅行者によれば、彼らの上着は「金モールであまりにけばけばしく飾られているため、そこにヨーロッパの服装を見いだすには好意が必要だった。」(p. 220) また断食月ともなると、^{イマーム}聖職者の教えがイスラム教徒の信仰心を刺激し「文明の進歩によってもたらされたいつもの寛容さは、この時期には容易に忘れ去られる可能

性がある」(p. 237)と言われる。旅行者は、スルタンとその臣下が、イスラム教徒の重要な習慣である金曜日の礼拝を行なっているのを見てこう結論づける。

コンスタンチノーブルで人が言おうとしているほどには、哲学的思想は進歩していない。ヨーロッパ式に教育されたトルコ人ですら、ロンドンやパリから帰国すると、相も変わらぬコーランへの執着を見せる。彼らのうわべの文明を軽く引っかいてみれば、忠実な信者をそこに再び見いだすことになる。(p. 173)

西洋文化は、帝国の近代化を目指す政府によって、いまだそれを受け入れる素地のできていないトルコ人に無理やり押し付けられた。そこに「無理」が生じ、その「無理」が芸術家ゴーチエを嘆かせる「不調和」を生み出すのである。

いずれにせよトルコ人の西洋崇拜は、基本的にゴーチエには評価されない。彼の目には、それは調和の取れた異文化の受容というよりも、むしろ、消化不良を起こしかねない異物の無謀な摂取のように思えるのである。こうして『コンスタンチノーブル』を貫くひとつの力学が垣間見えて来る。そこでは作家を含めた西洋人と、作家が目にするトルコ人とは、互いに向き合いながらもその視線はそれぞれ反対の方向を向いているものとして描き出されるのである。ゴーチエのテキストにある決まった表現が繰り返し現われてくるのはそのためである。それは西洋人とトルコ人の価値判断の乖離を強調するものである。例えば金角湾に新しく西洋風に建てられた兵舎は「トルコ人には大変な自慢の種だが、ヨーロッパ人には何も興味深いものはない。」(p. 95) スルタンの後宮の一室に置かれた機械仕掛けの柱時計は「おめでたいトルコ人の賞賛と異教徒ジエワールの失笑を誘う。」(p. 250) 兵舎に改造された聖イレネ教会に陳列してある西洋の近代的な武器は「トルコ人を大いに魅了し、かつ彼らは大変それを誇りに思っているが、ヨーロッパ人の旅行者を驚かすものは何もない。」(p. 254) 両者の価値観は永遠に交錯しない。

ゴーチエの旅行記に見られるこうした二つの異なる考え方のベクトルを、サルガ・ムッサは「シャセ・クロワゼ」«chassé-croisé»という舞蹈用語で表現している⁹。確かにお互いの立ち位置を入れ替える二人の踊り手の動きにも似て、ここで描かれるトルコ人と西洋人は正反対の価値観を指向している。トルコ人が西洋の近代文明に対して熱狂的な憧れを見せるとすれば、西洋人

⁹ Voir Sarga Moussa, *Relation orientale, enquête sur la communication dans les récits de voyage en Orient (1811-1861)*, Klincksieck, 1995, p. 201.

は逆に、改革の波が押し寄せる前のトルコ、失われし「古きよきオリエント」を懐かしむのである。

ゴーチエの旅行記作家としての戦略のひとつは実はここに隠されている。彼は、西洋の文物を取り入れることに熱中するトルコ人の姿を皮肉を交えて滑稽に描き出しているが、その営為はまた別の視点から見ると、失われつつある「伝統的なオリエント」の価値を強烈に印象付ける側面をも持っている。西洋人がオリエントに求めるものは、現実のトルコには見つからない。頭に描いていた「想像上のトルコ」は不在とされ、ただ記憶の中に宙吊りにされることで、ますます西洋人には貴重に思えてくるのである。ゴーチエがそのテキストを通じて浮かび上がらせようとしたのは、まさにこうした「不在感」によって実体化されるオリエントの「存在感」である。この観点からすれば、作家が駆使する「皮肉」という修辞の役割がより明確になる。つまり作家がトルコ人の試みの滑稽さ、空しさを強調すればするほど、その背後で失われたもののかけがえのなさが際立つということになるのである。結局のところ『コンスタンチノーブル』では、冒頭で想定したように、「西洋」対「オリエント」という対立の構図は無効とされているのでは決してない。それは逆により鮮やかな形で強調されているのである。

終わりに

これまで「オリエント」は、西洋人旅行者の視線にとって揺らぐことのない独立した空間として描かれてきた。それは「ヨーロッパ」とはあらゆる点で対照的な世界であり、西洋文明の絶対的な対置物として常に「静的」な立場を享受してきたのである。ゴーチエの旅行記では、二つの世界の間の均衡は覆される。「オリエント」はもはや修正不可能な絶対的な空間ではなく、外部の要素を取り込みながらその本質を変えていく生きた世界として描き出される。つまり「オリエント」はゴーチエのテキストでは「動的」な状態に置かれるのである。

ゴーチエの旅行記の興味深い点は、こうして一見オリエントが西洋世界に対して突きつける「他者性」の衰弱が強調されているように見えながら、実はそれは逆にその「他者性」を強烈に輝かせるための仕組みとなっていることである。従来の旅行記が行うように、オリエントの西洋に対する「他者性」をそのままの形で提示するのではなく、そこに歴史の時間軸を導入する。「オリエント」は「オリエント」であることをやめてしまうかもしれない、と仄

めかすことで、逆に失われゆく文明としてのオリエントの存在意義を際立たせるのである。こうしてトルコにいま残る近東本来の「美」は、それが西洋化の波によって消滅の危機に瀕しているからこそ、ますますかけがえのないものとして映る。それを摘み取り、テキストに記録していくことこそが「文学的銀板写真家」の使命となるのだが、その問題に関する考察はまた別の機会に譲ろう。